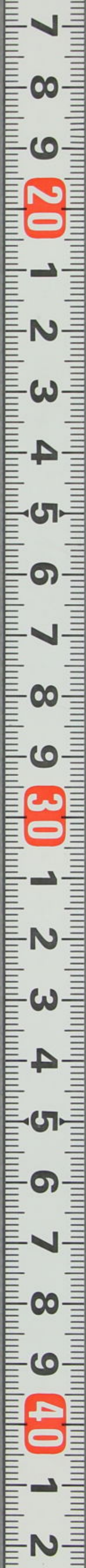


^ 5
4463



八五
4463

門へ 5
4463
巻



祖の御は御徳と文章をねえ
ふと けしとをわいし けし
筆はあともいふし けしは
まじりあつたのけしあけ
まじりあつたあつた人の海
し けしあつたあつたし
なすいあつたあつたあつた

昭和九年
十月一日
研求

此處の風よと我もわ
のこころ

のあはれ

しるるまゝの風

為極尾由抄

眼一はくや壁を染むは種一ツ

素行

埋め欠くささる風もなき月

宛成

相分ちぬ牡丹の玉をたもて

露玉

邪魔を車を知つた藪尻

曇芳

馬を其足えく、雲の降り雲ひ

成

大まく道一、餘らひなき

り

解を追ふ備たり石投つるを
幾を組して下あま自打さ
一旦の流りし藝ハと見ゆとく
身形を如さ家ち能侍
雅舞の見るとは座敷借切て
持病は外まやむ引ゆる如
室の背のふれとまゝの宵の月
揚屋さひく門の氣向く

芳 玉 成 滅 玉 成 芳 成 滅

桑は茂きりまわ伸ぬ松は枝
影つむふひはなると川口
井南よ一とち前よと茶をねり
仕つあはよまよおとれしは格
痛ひまよとまよとまよの敷
宿ま文て思とたうらふ

芳 玉 成 深 玉 芳



月澄く事足るあきの路うぬ
 阿く理はくまう鳴くくは
 との家を帰くくまふまのめく
 惣菜あての者う我へる
 初懐くまの通りく深あり
 耕のまはつくまもあふ

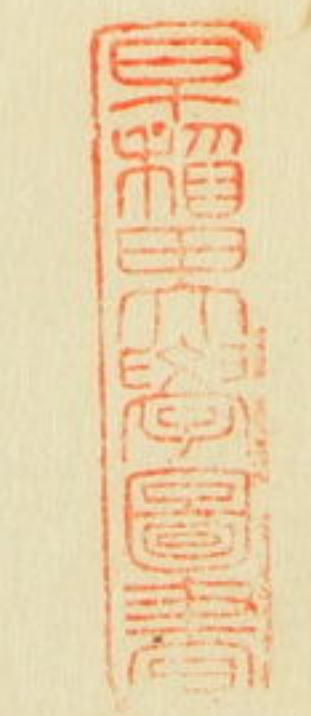
菘 菘 菘 菘 菘
 成 成 成 成 成

休む波学難はひを志め申し
 瓶やく土の出ところを中
 線香よくつを片と火の消ゆを
 ときささくくまきくを打る
 雲害は浴を一里はさく渡し
 月を冠りくく夕くくや
 たらくまのま業かまを叩ひま記
 障子紙換りくかこふ寝所

玉 玉 玉 玉 玉
 成 成 成 成 成

造化のなつて大正の事をいふ
村はあまのれ後目うきさき
五六月の暮のちのちの
まじうの買ふあまのれ
壬生寺は踊見より反南に
昭うねえのせえかろおれし
ひらひら焚きあがりうらひ
みふとくはれをいふ風さき

玉 成 芳 玉 行 芳 成 行 玉



短束の宵くまの鐘の聲
敵をたふしはゆ抱女ふみ書
精をいかにぬるれあつし
羽衣のやりに杖はさ別
猶ほきくまを象をいふ
色深うなるは庭は鶴
はあつて月見色を月見し
駒を引て白く繩あま

玉 成 誠 芳 成 誠 玉 成 芳 玉 成 芳

海より紅紫の似合ぬ奇麗好
 あつりて相対故を満す
 是より吉野の松をおくらせ
 露より賦の御留場は勝
 三月一世してひらく能舞臺
 文は用意は蘆あてけは
 玉 誠 芳 成 珠 玉

流連より風よもそそぐ所の勢
 雲脚を中へ更らして月
 砂流を相あはせ花の無花は
 四五貫わく家松のふきと碧
 網を海に相りまわらば渾のまら
 丁度冬をまはれあて乾粒日
 墨 芳
 龜 玉
 範 成
 素 行
 玉
 芳

庚辰秋喜い小室へ池をたり
従て秋の初夜とてりなり
獨裁の使りに越え向川岩
肥立小こよふやき初産
細くと過る世帯をとり乱し
往來舟人のやまも葉柳
月影出まわさよの秋の聲もそ
無き舟りよも邪魔も行く

行 成 芳 玉 行 成 芳 玉

貯へたるまゝの月の上張葛籠
船人ひとりて船の番もれ
船はうら海を晴まるとの白
誰とてくく三日立布
板の舟も毛を引離れを投出し
意はうとかがひくくをよ
舟分を留る舟よ古紙縮てを
泣と舟りよも笑し謎い子

行 成 芳 玉 行 成 芳 玉

枕灯を消さしと筆をわきまを
志す一見おくるをけり
取らぬとさすなつと豆を打仕置
京土人争はるをわきまを
隣をけりよ醫者の位をけり
かきし水とさすよむく大
まのきるとけりを異さるの月
破さし見えん落る桐の葉

成 玉 珠 成 玉 芳 成 珠

おやうやきてる砦の身はさる
城下なるうらまをいんや
甲子の時を天幕のつきけり
より一ふくかきし
香をもとるふきの香は落る
清き種仕舞てしむ小道

成 玉 芳 成 珠

澄や香之建たり秋は水と虫
芽木は真し一虫丸は月
満る板もある解を振舞て
袴はひきき疵はなからぬ
年より旅より門並に松は立掛ひ
掃くせくある産より雲見の
玉 行 成 芳 行 玉

たふくはきを漱く月よりけ
筆を大事に洗せて置
かこもは簾一枚も起あけ
むし立雲より夢の浮橋
二揺籠の舟は急六里は留ん
松風とまきくおとまり也
米買てくまは蒼梧の舟の月
将棊のうけよ鶴とくそ
玉 行 成 芳 行 玉

於附於うらぬ角力人を出し
是よりしくさるる情を執
小窓より白濁を流し聲を
あつておきりよき由は月代
さしと扱糸足の流りより
艾をひねり自注は遠く
飯粒を煮て掃除を怠り
かけんは塩のきく色一箱

拙
玉 誠 成 芳 行 玉 芳 求

六月於うらぬ玉用は先
情を毛休む本音の麻
身は長く通果の意佛は
干し玉は好は落る掛
御次書、料理下を廢の
雪よりかくて庭の石
入る月於あへ立りぬる
是れはうらぬ志守る初

玉 誠 成 芳 誠 玉 芳 成

成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成
 成 芳 誠 玉 芳 成

素行居士

長崎産安政三年十月三日
於江戸卒行年不詳

墨芳居士

善光寺産江戸住安政五
年八月十六日於安房龍島
卒行年四十五

由誓居士

江戸産安政六年九月二日
卒行年七十二

拙誠居士

同産同年十月十七日卒
行年四十七

紀書の終りのんをききし一冊子よ

はしりてふれ道福をふり範成

を龍もたぬ子のをてん中ねる

夢の歌なき名の本をすれ未だ

海堂

後序



在書之為物也生于画不為於
其際但以所為根故不為之
其本也古詩云白雲出天際
去處比老僧雲來有由是觀之
則吾之冒不如僧之間亦可也

年五十九元祿以來者能與者似
類禪僧者以空水為身清遊之
涯或有不歸者生跡如雲而空
未肯也往年長碌人素行善克
寺人墨芳二子各去袪野清遊
不歸死於江者所謂冒汗空者

也江者人蕪成龜玉為二子之
友今歲刻之連句以修也福并
洪秀華由誓同社拙誦之祭云
嗚呼龜成龜玉之輩結社于江
都亦晒出遊近平雲之本相名
結身素以墨芳法子之視水陣

於以嶽此集為回骨根之雲而
朱以之為根之雲也華正唐申
陽報節江考槐正古推於教
荒正源文



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '文' and '人'.

